

災害救援本部通信

No.8

発行日：2012年8月1日
発行所：真宗大谷派宗務所
(組織部)
発行人：災害救援本部長
岩坂賢龍

東日本大震災救援金についてのお願い

救援金について、引き続き皆さま方のあたたかいご支援を
重ねてお願い申し上げます。

救援金口座 <郵便振替口座番号> 01030-4-2244
<加入者名> 真宗大谷派宗務所財務部(救援金)

振替用紙の通信欄に「東日本大震災救援金」と明記くださるようお願いいたします

子どもたちの笑顔 を取りもどしたい

復興の基盤として

心の復興を 下

本号では、先号に引き続き、「ふくしまキッズ実行委員会」の
吉田博彦事務局長に寄稿いただいた、ふくしまキッズの
これまでの活動と今後の展望について紹介いたします。



心の復興を求めて



ふくしまキッズ実行委員会事務局長
NPO法人教育支援協会代表理事
吉田博彦

をやっています。阪神大震災の後、日本社会は経済優先主義を反省し、社会を変えようという当時の共通認識を踏まえて、中央教育審議会は教育の基本方針を「競争から共生へ」「知識から生きる力へ」と舵を切りました。それは「物の豊かさから心の豊かさへ」と人の幸せの価値観を変えようとするものでした。

しかし、その後、その方針は「ゆとり教育」というレッテルを貼られて批判を受け、二〇〇〇年代には競争主義が復活し、共生の理念は形だけのものとなり、二〇〇九年の流行語大賞に「無縁社会」が選ばれる社会となりました。そうした社会に、二〇一一年三月、東日本大震災が起きたのです。

結局、私たちは一九九五年の阪神大震災の時に「絆が大切だ」「世のために役に立つ生き方をしたい」と一度大反省をしたはずなのに、それがいつのまにか「無縁社会」という社会を生み出してしまったのです。つまり、ボランティア活動への参加率が示すように、何も変わっていなかったのです。

今、我々の社会は阪神大震災のときにはなかった原発事故という科学技術のツケを突きつけられています。被災の規模も阪神大震災の時の比ではありません。今回もまた「絆」の文字が躍っています。それで事足りるはずがありません。共生の精神である「人を助けることは自分が助かることだ」ということを本気で実践し、大人の務めを果たし、自分の生き方を変えない限り、我々の社会に復興はないと思います。「復興」の最



スタッフミーティング

おわりに

「ふくしまキッズ」は原発事故に起因した子どもたちの問題を解決しようと活動を開始しました。この原発事故はこれまでの我々の社会を象徴する問題です。人間の欲望を満たすためのエネルギーを得るために、自然界では存在しないさまざまな物質を作り出し、その作り出したものが全くコントロールできないのです。自然に手を入れ、人間の都合の良いものにしてしまうと、その作り出したもので与えられた豊かな自然が汚され、人間存在が犯される。こうした愚かさには私たちがようやく気がつき始めています。

「ふくしまキッズ」はそうした福島原発の問題を基盤に、単に原発・原発推進などという愚かな対立を超え、自然が与える子ども達の笑顔と元気にはげまされ、今の大人たちが自分たちのこれまでの社会に対する責任を取り、大人たちが自分の生き方を見つめなおす、それを最大の目的として活動を続けていくつもりです。

2012年7月九州北部地方で発生した豪雨災害により被災された方々に対し衷心よりお見舞い申し上げます。

被災地支援の蓄積から 二年目の東日本大震災

◎特定非営利活動法人レスキューストックヤード
◎岐阜教区第11組「成寺候補衆徒」
◎組織部非常勤嘱託

代表理事

栗田 暢之



一九九五年阪神・淡路大震災で被災したK氏の遺言により私が葬儀を行った。行年八十二歳、二〇〇七年六月のことである。

K氏夫妻の自宅は、東灘区で全壊し、震災から半年後、妻の弟を頼り、愛知県内に引っ越した。その頃、当時、私が勤務していた同朋大学の学生らが支援活動を精力的に行っており、夫妻と出会うことも必然となった。夫妻には子どもがなく、学生らを実の孫のようにかわいがり、学生たちも実の祖父母のように夫妻を慕った。3年後、夫妻が神戸市に戻ってからも、その交流は続いた。K氏の生前の言葉である。「震災ですべてをなくした。でも、震災ですばらしい孫たちに出会えた。私たちは世界一幸せだと世界中の人に大声で叫びたい」と。

二〇〇七年能登半島地震。仮設住宅の被災者を盛り上げようと、地元ボランティアなどが震災当初から支援活動を精力的に行っていた。同年七月七日。天の

川が見事に見える七夕の日は、この地域にとって格別のお祭りであり、大いに盛り上がったはずだった。しかし、その翌日、短冊には想像を絶する言葉が書かれていることに気づいた。細かい字で「死にたい」と。「与えられるばかりではつらい」ということであった。阪神・淡路大震災でのK



家具の運搬作業(平成20年8月末豪雨災害)



瓦礫撤去作業(東日本大震災)

氏の感謝と喜びの言葉、そして能登半島地震での「与えられるばかりではつらい」という短冊の言葉は、支援活動に携わってきた私にとって、大きな問いとなった。

そして、二〇一一年東日本大震災。確かに未曾有で想定外の被害であり、息の長い支援の必要性は言うまでもない。しかし、その支援は「被災者本位」であるか。支援者側の都合に合わせようとしていないか。その支援は「地元主体」であるか。その支援は「ゆっくり丁寧」であるか。復興は、急ぐものもあるが、むしろじっくり醸成していくものである。

与えるだけの炊き出しや物資の提供ではなく、地元と連携した「元気づけ」や「弱者を取り残さない」といったつながる理念がなければならぬ。最大の敵は「無関心」である。いよいよ智慧を絞って、被災者や被災地域が本来持っている力を引き出していける取り組みが必要ではないか。

放射能測定器が活用されています！

皆様からお寄せいただいております救援金は、「東日本大震災復興支援資金」として保管し、福島第一原子力発電所事故によって被害を受けた方々への支援として使用しています。

このたび、現地から要望を受け、土壌や空間を測定できる放射能測定器を購入し、貸し出しを行っています。また、この六月には、食品測定器二台を購入いたしました。

現在、食品測定器は、福島県内で活動するNPO法人に貸し出ししており、これから福島市、いわき市で多くの方々に利用されていきます。

仙台教区内で除染を行っている寺院やNPO団体が利用されています。

【土壌測定器】



【空間高線量測定器】



【食品測定器】



貸出先

いわきの子供を守るネットワーク

場所

子ども未来NPOセンター
福島県いわき市平三倉67-11

貸出先

子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク

場所

野菜カフェ「はもる」
福島県福島市新町3-14

「現地復興支援センター」ホームページ
<http://fsc.higashihonganji.or.jp>

ホームページ内のブログでは、最新の現地復興支援センターや各教区のボランティアの活動日記に加え、「ボランティアの募集」「救援物資のお願い」等についても随時掲載し、被災者の方々に対する支援活動をお知らせしています。

当派の寺族、門徒、関係学校在学学生又は卒業生であって、東日本大震災へのボランティア活動を希望される方で、現地復興支援センターのサポートを希望される方は、センターまでお問い合わせください。



福島県の被災者の方々に飲料水をご提供ください

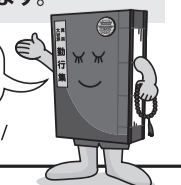
福島県では、引き続き、乳幼児や妊婦を中心に、安心して飲むことのできる「飲料水」の需要が高まっております。

災害救援本部では、特に福島県に住まわれる方々への支援として、全国のご寺院・ご門徒に対し、「飲料水」の提供を呼びかけております。皆さまのご協力をお願いいたします。

提供方法

飲料水(1本あたりの内容量や規格については問いません。)を直接「現地復興支援センター」(下記参照)までお送りください。なお、提供いただく際の費用につきましては、大変お手数ですが、各位でご負担いただけますようお願いいたします。

ご協力を
お願いします



東日本大震災「現地復興支援センター」

〒983-0803 宮城県仙台市宮城野区小田原1丁目2番16号(仙台教務所内)

TEL:090-7345-5049 FAX:022-297-2827 ホームページアドレス <http://fsc.higashihonganji.or.jp/>